
優等生は俺じゃない

仲条風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生は俺じゃない

【Nコード】

N2572Z

【作者名】

仲条風雅

【あらすじ】

魔法高校執行科に入学し優樹は、妹の加奈によって、執行科1年の優等生にされてしまう。更に、有名人となった優樹は、様々な問題へと、駆り出され、校内の権力者にも、頼りにされて、本当は優等生でも何でもない優樹は、苦労しつつも降りかかって来る、面倒事を何とか片付けていくが……。

「1」 初登板で嫌な予感（前書き）

始めまして、中條風雅です。

今回が初投稿なので、表現や文章が、上手く無いと思いますが、呼んでくださるとありがたいです。

誤字やアドバイス、感想などが有りましたら、コメントしてくれると助かります。

「1」―初登板で嫌な予感

「…ピピピピピピピ…」　ばん、と目覚ましを切りベッドから這い出る：そして、まだ半覚醒のまま時計を見る：4時30分？：早すぎる。

見間違いだと思い、手の甲で眼を擦りもう一度時計を見るが：やはり4時30分のままだ、こんな時間に起きる理由など、どう考えてもない。

そう思いまた布団に顔を埋める：だが一度起きてしまったせいか、寝付けない　：結局そのまま20分程たち、二度寝を諦め部屋から出る：階段を降りリビングへ向かう。

カ　チ　　ャ「？」　リビングの扉を開けると中から食欲を刺激する匂いが香ってきた。

（カレーか？）　部屋に入りキッチンを覗く、そこで妙に機嫌よくカレーを作っている、一つ年下――妹は早生まれなので学年は同じ――の妹に声を掛ける。

「早いな加奈、もう起きてるのか」

すると、龍崎加奈、俺の妹は、俺が話し始めてから、終えるまでの間に、俺に振り向いて、絵に描いたような笑顔を向けてきた。

「おはよ、兄さん、今日は兄さんの好きなカレーにしたよ、もうすぐ出来るから待っててね！」

どうやら俺が声を掛けるのを待ち構えていたようだ。

「：ああ：それより：どうしてこんなに早起してるんだ？」

返事に少し間が空いてしまった、自分の妹の笑顔に見惚れてしまいそうになるなど、兄として拙いと思っているが、加奈は鼻目に見ても可愛い：と思う。

目鼻立ちはしっかりしてるし、肌は白過ぎ無いぐらいの肌色で、髪は軽い癖っ毛で、明るくオレンジに近い茶髪を、肩の上まで伸ばしている、背は160？ぐらいと、けして高くないが脚は細くウエス

トも細い、胸もそこそこある、いくら妹とはいえ至近距離で、笑顔を向けられると少し動揺してしまう。

「どうしてって、今日は私と兄さんの入学式だからに決まってるでしょ。」

加奈は笑顔を保ったまま、心底楽しそうにしている。

（なにがそんなに楽しいんだ？入学式がそんなに楽しみなのか？俺には理解出来ないな、面倒と思いはしても、学校が楽しみなんで、精々入学出来て良かったぐらいにしか考えてなかったなあ。）

俺が会話中に考えに耽っていると、加奈は

「はい、ブラックでいいよね？」

といって温かいコーヒーをくれた。

それに俺は、「ありがとうな」と加奈の頭をポン　と軽く叩いて部屋に戻り、テレビを点け、今の時刻を確認する、4時56分：いつもより時間が進むのが遅く感じる。

加奈が朝ご飯を持って来るまでは特にする事がないので、リモコンを操作していつものニュース番組——普段ニュースなど見ないため、妹がいつも見ている——にチャンネルを合わせる。

「：先ほど4時40分頃に発生した、電車を占拠した事件の犯人は、人質の一人で、登校途中だった、第二魔法高校2年：執行科所属の学生の協力もあり、無事に解決されたと発表されました。情報によると、彼は取材陣の質問に対して「第二魔法高校からは、家が遠く登校に時間が掛かるため、いつも余裕を持って家を出ていたおかげで、事件解決に協力でき、いつもは不便に思っていました。今回は良かったと思います。」

と返答しているとのこと。です。

（高校に執行科なんてものが出来たのは何時からだったかな…）などと、また考えに耽ってしまう。

「執行科」　技術の進化によって近年登場し、銃などの武器に変わって戦争や治安維持な

ど、様々な場面で使われる様になった特殊な技術があり、新しい技術が登場すれば、その技術を専門とした新しい機関も生まれる訳で、近年新しく生まれ、各国で重要になって来ているのが、

「魔装検事」

別称、執行人だ、魔装検事は、名の通り魔法の装備を駆使して事件を解決に導く職業で、その執行人に成るための学科が執行科だ。

魔法自体は半世紀前頃から実用化され、先ず医療に始まり企業製品、家庭用品、交通手段といった具合に普及してきた。

その次に普及が始まったのが「魔装」だ。

そんな最新の装備の使用を許可されている、唯一の機関である魔装検事に、成る為の教育を受けられる執行科は、当然人気が出る訳で、魔法の実用化と共に、増設されてきた魔法学校の中でも、一番の倍率を記録している。

（魔法なんて、まだ謎も多い、危険な技術を使わなきゃならない職業に、誰も彼もが成りたがるのか：執行科が無駄に人気高いおかげで大して成績良くないこっちは入試で大変な思いをする羽目になったからな：まあ今日から無事に魔法高校執行科に入学出来て良かったな。）

そこまで考えた所で妹がこちらを睨みつけているのに気づいた。

「どうした？加奈」と妹に声かける、

すると加奈は、返答せずにキッチンへ戻って完成したカレーライスを持って来て、俺の前に少し乱暴に置き、自分の席へ戻ると、既に食べ終えていたらしいカレーライスを、片付けに再びキッチンへ向

かった。

どうやら、考えに没頭していて、加奈に声をかけられても気付かなかったみたいだ。

妹はかなり怒っているらしく、（これから一緒に、入学式に行くのに、妹の機嫌が悪いのは拙いな…）と思った俺は、テレビに写し出されている時計をみて、家を出るまでに余裕が有ることを確認してから、妹の攻略？へと向かう事にした。



その後、30分程たっぷり？時間をかけて妹を説得した優樹は、三校——第三魔法高校の略称——の制服を着て、妹と一緒に、三校の最寄り駅で電車を降りて、三校に向かって歩きながら、（この道を歩くのも入学説明会以来か、久しぶりで緊張するなあ。）などと考えていた。

「国立」，第三魔法高校」：魔法関連の分野において、比較的進んでいる日本で、三番目に開校された第三魔法高校は、日本国内に12ある魔法高校の中でも、執行科の導入が最も遅かった、そのため他の魔法高校に比べ倍率が低く、比較的簡単に執行科に入学できる（それでも入試倍率は3倍を越えている）と言われている。

周りを見れば、優樹達のように、緊張した顔つきで、三校までの道を、歩いている者も少なくない。

そんな中、優樹達の丁度前を歩いていた、男子生徒が優樹に向かって「あんたも新人生だろ？」と声を掛けてきた。

優樹は、妹に興味があるのは見え見えだと思ったが、入学前に同学年の友人が出来るのは、正直ありがたいと思い、「ああ：俺は龍崎

優樹、こいつは妹の加奈だ、宜しくな。」と少し愛想良く応え、加奈も「宜しくお願いします。」と応えた。

「俺は一条拓人、優樹、加奈、宜しく。」

それぞれ紹介し終えて、一緒に三校を目指しながら、優樹は、（こいつ意外といい奴だな・）などと思う反面、一条と同じクラスになったら大変だろうなと考えていたが。

この時優樹は、何か予感の様なものを感じていた、それも余り歓迎の出来ない予感を…。

「1」―初登板で嫌な予感（後書き）

優等生は俺じゃない、第一話最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

第二話も、近く投稿する予定なので、楽しみにして頂けると嬉しいです。

「2」 一副会長の面倒事（前書き）

優等生は俺じゃない第二話、一話が意外にも多くの方々が呼んで下さっていて正直嬉しかったです。

二話は一話よりも、少しだけ長いのですが、最後まで呼んで下さいお願いします。

「2」一副会長の面倒事

玲奈は、入学式の講堂入り口から直ぐの所にある自販機のベンチに座っている、二人の男子生徒の一人に見覚えが有った、一人は穏やかな印象の顔付き、少し癖っ毛で、明るくオレンジに近い茶色の髪と瞳、背丈が170と少しの少年…もう一人は少し青みがかった、色素の濃い黒髪、少し痩せ型で、180近い身長だが、身体は鍛えているのが判った。

（茶髪の少年は確か…優樹君？）



「ホームルームまでどうする？ 優樹」

「ホームルームまでしばらく有るからな…とりあえずクラスを確認してから考えよう。」

優樹と一条は入学式が終わった講堂の前で、まだ講堂内にいる加奈を待っていた。

三校では、入学式が終わると個人でクラス表を確認して、自分のクラスのホームルームに向かうのだが、式が終わってからホームルームまでは時間が開いていて、クラスの友人を作ったり施設の見学など、自由行動の時間となっている。

優樹は入学説明の際に大まかな構造は確認してあるので、特に予定がなかった。

「そうだな、加奈が出て来てから考えるか。」

当然の様に加奈を呼び捨てにした一条に、文句を付けようとした所で優樹は、こちらに向かって来る女生徒に気がついた。

一見無表情にも見える顔付きは、涼しげな印象の合う美少女といっ

た所か：長い黒髪を頭の後で軽く結いてある。

（あれは確か：）

「入学説明会以来ですね、水城先輩。」

「覚えててくれたんですか優樹君。」

「入学説明会ではお世話になりましたから、それより自分に用でもあったんですか？」

（優樹としては世話になったからと言うより、玲奈の容姿が印象に残っていたのだが）

「ええ：優樹君に用事が有ったのですが、その前に自己紹介をしたほうがいいですね。」

そう言うのと玲奈は一条の方を向いて、初めまして生徒会副会長の水樹玲奈です。」

突然話題を振られた一条は完全に油断していた為「え？：どうも：：あ、一条拓人です」かなりおかしな返事になった。

この瞬間、優樹は一条に初めて声を掛けられた時に拒絶するべきだったと深く後悔したのだが、玲奈は別段気にした様子はなかった。

「それでは、本題に移って良いですか？」

優樹はこれ以上面倒事は御免なので、玲奈の問いに頷いた。

「では、単刀直入に言いますが、優樹君、生徒会に入りますか？・勿論強制ではありませんよ。」

優樹は驚きと呆れで、微笑を浮かべ言い切った玲奈の顔から目が離せなくなってしまう。

一条も隣で目を丸くして、玲奈を凝視している。

そんな優樹達の反応をみた玲奈は、優樹の反応が心底意外だと言うように、優樹へ問いを重ねる。

「そんなに驚きましたか？私は優樹君の様な人が生徒会に必要だと思っただけです。」

玲奈の問いに我に返った優樹は、玲奈の問い掛けに対し一息に返答する、

「なぜ自分が生徒会に必要なんでしょうか？もっと適任者がいるで

しょう、自分より加奈の方がまだ適任でしょうに、あなたは自分を何だと思っているんですか？本気で言っているとしたら、呆れますね、無駄な過大評価はむしろ迷惑ですよ、自分にはそんな責任のある仕事は出来ませんよ！」

語調も強くなり失礼な態度だったが、残念ながら動揺しきっている優樹にそんな事を気にしている余裕は無かった。

まるで優樹が玲奈を詰問している様だったが、優樹は態度を弁えるどころか、寧ろ更に語調を荒くして、玲奈に抗議し続ける。

玲奈が、「ごめんなさい！」と俯き、半泣きしながら頭を深く下げた所で、優樹の中にあるクールな玲奈の印象と余りにかけ離れた玲奈の行動に、ようやく自分の態度に気付いた優樹は、目を逸らしながら、

「少し言い過ぎました」

謝罪かどうか微妙な返答を返した。

玲奈は努めて平静を装って、

「まあ：詳しい事はまた次の機会に言うことで。

優樹君も気にしなくて良いですよ。」

と言い振り返って歩き去って行く。

表面上では平静を装っていても、その足取りは無意識に早歩きになっていた。

それから数分経った所で加奈が講堂から出てきた。

「ごめん兄さん待った？」

加奈はつい今までの空気を知らないなので、明るい様子で声をかけてきたことは、優樹にとっては救いだった。

加奈は優樹を過大評価している節があるので優樹は加奈に悟られないように最大限普段通り振る舞いながら加奈の隣に陣取っている生徒について訪ねた。

「いや：待ってないよ。それよりその子は？」

「湊こなたです！宜しく願います！」

「こなたとは、入学式で隣の席だったんだ、それで仲良くなったん

だよ！」

式で隣だった女生徒と一緒にいた加奈が、優樹達を見つけたのは、丁度優樹が生徒会に誘われて、玲奈に抗議し始めた時だった。

その場の気拙い空気を察した加奈は、優樹達に悟られないように聞き耳をたてた。

「そんな……驚きました……樹君のような……必要」

玲奈の声は途切れ途切れにしか聞こえなかった。

「どうして自分が生徒会に必要何ですか？」

もつと適任者がいるでしょう、自分よりまだ加奈の方が適任でしょうに、」

その後の言葉は耳を抜けていった、

（兄さんが生徒会？）

加奈は優樹が生徒会に誘われたと言う事実を知って、それを考えた玲奈に感謝せずには居られなかった。

と言うのも、加奈は自分の兄を尊敬している、普段は良くも悪くもない普通の生徒だが、本当は自分なんかよりずっと優秀な筈だとも思っている、そんな兄が生徒会に誘われたのだ、加奈はこれは自分の兄を周りに認めさせるチャンスだと思った加奈は、

（でも、兄さんは生徒会に入るつもりが無いのかな？私の方が良いとか言ってたし、でもこんなチャンスなかなか無いよね？やっぱり兄さんには悪いけど、何とかして兄さんを生徒会に入れなくちゃ！）



講堂入り口の側にある自販機を伺っている二つの人影があった、片一方は木の陰に隠れて自販機を覗いている、もう一つはその姿を一步下がった位置で眺めていた。

木に隠れているのは、160ほどの背丈でスレンダー、明るい茶髪お肩まで伸ばした少女、もう一人は黒く短いストレートヘアで、整った顔を歪めている。



こなたは樹に隠れて自らの兄を覗いている友人を複雑な心境で見ている。

こなたは自分の容姿に多少の自信があったのだが、加奈は自分なんかよりもずっと可愛いかった、そんな加奈にこなたは寧ろ尊敬のような感情を抱いていたのだが、加奈の兄、優樹を一目見た時に、別の感情が生まれてきた。

それは一種の嫉妬のようなものだ、優樹には自分よりも可愛い妹がいる、更に加奈の様子を見ると仲も良さそうだった。

加奈は優樹の話が終わると優樹の元へと向かい、こなたもそれに続く。

「いや、全然待ってないよ。それよりその子は？」

優樹が自分の事を話題にすると、こなたは無駄に気分が良かった。

「湊こなたです！宜しくお願いします！」

その所為かこなたは、不自然な程に機嫌良く優樹に返答してしまったのだが、誰もそんな事に気を割いているような余裕は持っていなかった。

〔2〕 一副会長の面倒事（後書き）

一話を投稿してから二話投稿まで、6日も掛かってしまいましたが、三話はもう少し早く投稿する予定ですので、ぜひ楽しみにして下さい下さい。

まだ話は全然進んでませんが、三話で少し話を進めようと思っています。

「3」 一誤解の始まり（前書き）

予定より1日遅れてしまいましたが、是非読んで下さい。

[3] 一誤解の始まり

1年C組ホームルームでは、担任の若い男性教師が三校について説明をしている。

「皆さん知っていると思いますが念の為に説明しておきますと、第三魔法高校は1学年に付き540人、全校生徒は約1600人、内分けは執行168、魔工156、魔装120、医療96人で、学年毎に1クラス45人で12クラス、1日8限、週5日制に成っています。」

12の魔法高校は多少の差はあるがどの高校も、一般的な高校からすると生徒数が多い、これは魔法技術の重要度を表している。魔法は技術の発達した国では例外なく積極的に使われていて、一部の国では魔法装備を軍事的に使うとしている国もあって、日本でも魔装検事意外に、軍事的な目的を持つ機関を創ろうという動きが出ていて、直ぐにでも国会で決議になると言われている。

三校には、執行科、魔工科、魔装科、医療科の4つの学科があり、魔工は魔法を用いた生活、企業製品や、施設、交通機関の、開発などについて学ぶ。

魔装は魔法装備の開発や整備など。

医療科も魔法医療について学ぶ。

魔法高校は魔法に関して勉強する、一種の専門学校みたいな物だが、だからといって一般的な勉強をしなくて良い訳では無い。

そのため1日に8限もしなくてはならない、その内、1限から6限までが普通教科、7、8限が魔法について各々の学科で学習する。7時半から1限が始まり、1限につき50分、次の授業まで10分で、6限から7限までの50分——1時20分〜2時10分まで

——が昼休みになっていって、8限が終わると4時になる。

担任は学校の基本的な構造などの説明を終え、今は部活、委員会や生徒会について話している。

「三校の生徒会は予算などの一般的な仕事意外に、風紀委員の活動も兼ねていて、役職は会長、副会長、会計、書記、風紀長の5つで、毎年新入生からは、各学科につき2人役員に成る事になっていて、それ以外に会長など重役の指名で5人まで入会出来ます。」

生徒会は風紀委員も兼ねているので、大体の人は、入会してから能力によって、書類などの中仕事と巡回などの外仕事のどちらかの仕事に偏って仕事をしています。

重役に就いているような人は例外ですが。」

優樹は担任の話を聞き、今朝の玲奈との事を思い出していた。

（水樹先輩は俺が生徒会に必要だって言っていたけど、俺のどこを見てそう思ったんだ？先輩の前で何かした覚えはないが）

そこまで考えたところで同じクラスになった一条が担任に、「生徒会が指名するのって何か基準でもあるんですか？」と聞いたので一条の方を優樹が見ると、一条も優樹の方を見ていた。

優樹は一条を睨み付けたが一条はそれに対してニヤニヤとただけだった。

担任が一条の質問に返答する。

「基本的に生徒会が指名するのは、中、外を問わずに活躍出来る重役が判断した生徒です。」

そのため5人までとされていますが、年度によっては2、3人しか指名枠を使わない場合もあります。

ですのでもし皆さんが生徒会に指名されたなら、入会するのが良いと私は思いますよ。」

（指名枠なんて誰が：他人は勝手だな）

「皆さんの今後の予定ですが、先ず明日から3週間は通常日課、来月の一週目に部活動や委員会、同好会などの勧誘期間になっています。」

勧誘期間中は普通教科が無くなって、登校は8時半、9時から12時までが勧誘活動、1時から学科毎の授業になります。

その後は、学科毎の行事は有りますが、学校としての行事は予定さ

れていません。

今日はホームルームが終わったら昼を挟んで学科授業に向かって下さい。」

その後も担任の話を適当に聞いてホームルームを過ごし、一条と優樹は食堂で加奈を待っていた。

そんな優樹達に声が掛けられ優樹が振り返ると、其処に居たのは加奈：ではなく恐らく今優樹が一番見たくないだろう相手がいた。

「水樹先輩何か用ですか？」

不満を隠しきれていない声を聞いて玲奈は一瞬たじろいだ様子が見えたが直ぐに気を取り直したらしい。

「優樹君この前の事です：詳しい話をしたいので良かったら少「また今度にしてもらえませんか？」

食堂に入ってきた加奈を目にした優樹は玲奈に言葉を重ねて返答する。

そんな優樹の反応に今度こそ玲奈は言葉を失い、そそくさと優樹から離れていく。

玲奈の反応を見た優樹はまるで他人事のように、水樹先輩のイメージと少し違うなあと呟くだけだった。

「なあ優樹、お前って意外に自己中？」

真面目に聞いてきた一条をみて優樹は思わず吹き出しそうになりながら返答する。

「お前って意外に鈍感？」

優樹の鳩尾に肘打ちがめり込んだ。



普通教科の校舎から執行科までは10分程で着く、優樹達は事前に配られた執行科のパンフレットを持ち移動している。

優樹はメンバー——優樹、加奈、一条、こなた——の中で唯一
まともそうな人物に話を振る。

「加奈、執行科は1クラス24人で、クラス毎6分け授業って書いてあるけど、意味分かるか？」

「ええと…これは多分1クラス24人だから、6分の1して4人1組で授業を受けるってことだと思うよ？」

加奈の言葉に一条とこなたが反応する。

「なんでそんな事しなくちゃいけないんだ？」

「えっと…それは魔装検事になった時を想定してるんだと思います？」

「でも加奈ちゃん、6組に分けるってどうやるのかな？」

「それはパンフレットにも書いてありますよ？」

教室に6個ある大きい机に4人ずつ座るんだそうです？」

加奈には人の質問に答える際疑問系で返す癖がある為、疑問ばかりの会話になっていた。

「そうじゃなくて、どうやって分けるのかな？」

「？」

「？」

加奈も一条もこなたの言葉の意味が分かっていない様子だった。

優樹はやれやれといった具合に手を振ってこなたの問いに答える。

「多分名前かなんかじゃないか？」

一条はまだ不思議そうな顔をしていたが、鈍感な彼を気にする者は居なく話は次の話題に移る。

「ねえ兄さん、兄さんはクラス対抗戦の事どう思う？」

「？」

「だから、兄さんは出場する気無いかなくて！」

「俺が出たって役に立たないさ」

「そんな事無いってば、兄さんなら大丈夫だよ！」

「それに対抗戦は出たいから出るとか無理だよ」

「無理じゃないって！兄さんならクラス対抗戦どころか魔校戦にも

出られるし、三校代表にもなれるよ!!」

クラス対抗戦とは、各学年に7あるクラス同士で能力を競う行事で、1クラスにつき4人1組のチームを2組選んで代表として、代表同士、数種類ある種目で勝負する。

代表チームは優秀な者を選んで2チーム作る訳では無く、最初の授業で無作為に決まる6チームの中から、2チームを選んで決める為チームの中で一人だけ優秀でも代表には成れなくなっている。

また、クラス対抗戦で各学年毎に上から3番目までの成績を残したチームは、夏に魔法高校同士で行われる、魔法高校交流戦——大抵の人は魔校戦と呼んでいる——に出場出来る。

これは三校1年代表であり、三校代表というのは執行科の各学年から決まった人数を選んで作られた、全学年の混ざっているチームの事だ。

三校代表は12人で3チーム作るが、各学年から最低三人は選ばなくてはならなく、残りの3人は好きな学年から選ぶことができる。加奈のあまりの自信に始めは優樹がそんな優秀な訳が無い、といった態度だった一条が加奈の言葉を信じ始めていた。

「確かに生徒会に誘われるぐらいだもんな」

優樹は一条の口止めを忘れていた事に今更気付き一条を睨み付けたが、既に加奈には知られていたもので、この場合寧ろ一条が被害者だった。

加奈は大した反応をしなかったが、驚きを隠せていない者が一人いた。

「優樹さん、生徒会に誘われたって本当何ですか？」

「：まあ：一応本当かな：」

優樹は溜め息混じりに返事をした。

「兄さんもう返事したの？」

「いや：でも正直断ろうかと思ってる。」

優樹が正直に本音を吐くと

「兄さん！せっかく誘って貰ったのに断るなんて駄目だよ！」

——何故か天使のような笑顔で怒られた。

そんな加奈の様子を見てこなたは疑問を持った、こなたはその疑問を聞かずにはいられなかった。

「加奈ちゃんあんまり驚いて無いよね？どうして？」

加奈はそれに対して笑顔を崩さず即答する。

「私の兄さんは凄いからね！」

そんな加奈を見て、一条達の誤解が深まっている事を察した優樹だが、この時優樹は、既に手遅れだと心のどこかで感じていた。

「3」 一誤解の始まり（後書き）

3話は話を進めると言ったのですが、書き終わって読んでみると、思ったより進んでませんでした、4話こそは進展を期待して下さい。今まで投稿する時間と日程がバラバラだったので、4話からは午後0時に固定しようと思います。

〔4〕 一勝利と敗北と……（前書き）

4話は、少しですが話も進展して思うので、読んで下さい。

「4」一勝利と敗北と……

執行科1年4組、2列に3個ずつ置いてある大机の、後ろの列の真ん中にある机に優樹はいる。

机には優樹を入れて4人、6個ある机全て男女二人ずつで4人になっている。

これは入試の定員が男女共に84人になっている為だ、男女で同じ人数応募している理由としては、建前上は魔装検事になった際どんな相手とでも、その場で直ぐに息を合わせる為に学生の内から様々な人物と交流しておくべき、となっている。

だが学校の本音としては最近問題視されている、男女の格差問題の影響を受けたくないと言った所だろう。

執行科の授業で先ずした事は24人を6組に分ける事だった、分け方は男女毎に名前順で6個の机に一人ずつ割り振り、それを二回ずつ繰り返すという物だった。

その結果優樹の右には加奈がいる。

左には金色の癖っ毛で容姿はまあまあ良く中の上ぐらい、彼はハーフで名前は篠原ユウリ。

ユウリの奥に最後の一人、滝川マナが居る。

彼女は見るからに少女だ、背丈は150と少しと言ったところか、顔立ちにも幼さが残っている。

今は全員の組分けが終わって執行科のこれからの日程を確認している。

4組を担当しているのは平野深夏という若い女性教師——執行科の教師は全員、魔装検事の資格を持っている——で、爽やかな印象を与える容姿をしている。

「それで4組の予定だけど、今日から勧誘活動が終わるまでは、7限で筆記、8限で実技の授業を受けてもらうから。

実技は毎回内容が違うから少し早めに移動しておくこと。

それで：今日は残り時間で4組の生徒会候補を決めようと思ってるんだけど：一応言っとくと生徒会候補って言うのは生徒会の執行科枠2人を決める為に各クラスから1人選ばれる子の事ね。

それで集まった7人から2人選んで生徒会に入会してもらうの。」

そんな深夏の説明を聞いたユウリが質問した。

「先生ちょっと良いですか？どうやって7人の中から2人だけに絞るんですか？」

「ああ：それはね、基本的には話合いつて事に成ってるんだけど：クラスで選ばれた子って皆譲らないんだよね：それで結局は生徒会の重役に付いてる子に選んでもらうって事に成っちゃうんだよね。」何故か深夏はしょんぼりしている。

それを見た優樹は4組で良かったなと思った。

「そんな事聞くなって事はもしかしてユウリくん生徒会に興味あるのかな？」

「興味は有りますけど：生徒会に入りたいとかでは有りませんよ。」

「そう：じゃあ生徒会候補になりたい子いるかな？」

深夏の問い掛けに誰も返す様子が無かった。

すると深夏がだんだんしょぼくれて来るのが見て取れた。

深夏の様子を見ない振りをする事は優樹には出来なかった。

「先生生徒会候補って立候補しか駄目なんですか？」

深夏の眼が光ったのを見た優樹は、遣られたなと他人事のように考えていた。

「そんな事無いよ！先生が許可すれば誰でも大丈夫だよ！そうだ！

優樹くんに生徒会候補に成ってもらおうかな？良いよね？駄目でも

先生が優秀くんの事生徒会候補にしちゃう！！」

優樹は深夏に嵌められた形だった。

普通ならこのまま深夏に押しきられるのかもしれないが、面倒事に巻き込まれるのは御免だと思った優樹は、この圧倒的不利を打開する為の切り札を使う事にした。

「折角ですが自分は生徒会候補に成る気はありません。」

「そんなの先生許可しないよ、優樹くんが生徒会候補に成ってね。」
微笑みながら小首を傾げたりしている様子から見て深夏は自分の勝利を確信しているようだ。

しかし優樹もこの時点では時点の勝利確信していた。

（生徒会候補は指名されている事実が有れば辞退出来るな…それに水樹先輩に後で断れば生徒会の指名も辞退出来る。）

「生徒会候補にはなれませんが、自分は生徒会の副会長…水樹先輩に指名されていますから。」

優樹の返答を聞いた深夏は驚いているのがまる解りだった。

その様子を見て優樹は深夏に止めを刺そうとするが、隣で手を挙げている加奈を深夏が見付ける方が速かった。

「そう言えばさっきから手挙げてるけど…もしかして加奈さん生徒会候補に成りたいの？」

優樹は加奈がこのタイミングで手を挙げる理由を考え…直ぐに一つの仮定にたどり着いた。

そしてその時優樹は加奈に敗北したことを悟った。

それはこれから加奈が言う事が大凡分かったからだ。

加奈はいつも優樹の事を周りに認めさせようとする節がある、そのおかげで優樹は成績は中の上と少し良いぐらいだったが、内申や教師受けは学校内で一番と言って良い程良かった、実は三校に受かったのも内申による部分が大きい。

そんな加奈が、優樹が生徒会に指名されている事を知った時の反応は不自然な程に小さかった、それこそ優樹が生徒会に指名されている事実を元から知っていたかのように。

そして深夏の問いに加奈が応える。

優樹が予想した通りの答えを。

「はい…その、兄さんの変わりどまでは行かないと思いますけど。」

兄さんは水樹先輩の指名を受け入れると言っていましたから。」

加奈によって、優樹が生徒会に入会する意思が有るという既成事実が出来てしまった優樹に残されている選択肢は実質一つだ、そして

加奈は選ばれた7人の中から間違いない生徒会に入会して来るだろう。

そこまで考えた時優樹の耳に、「そうね…お兄さんが生徒会に指名されてるぐらいだし、加奈さんに生徒会候補に成って貰おうかな。皆もそれでいいよね!!」という深夏の声が聞こえてきた。

この期に及んでもまだ生徒会から逃げる方法を捻りだそうとしていた優樹だが、加奈が席に座ると同時に天使のような笑顔で、

「兄さん！一緒に頑張ろうね！」

と言われ、優樹は自分が半分以上諦めている事に気づいた。

「じゃあ生徒会候補は加奈さんにしてもらうとして、次は6月に始まるクラス対抗戦についてだけど…対抗戦のクラス対抗戦の代表は勧誘活動が終わってから一週間掛けて、実技の授業で決めるんだけど、方法は各チームで直接戦って貰って成績が良かったチームをクラス代表に成ってもらおうと思ってます。

戦うって言っても魔校戦であるような本格的な物じゃないからね…クラス代表決めるまでにお互いの特徴とかは把握しておいてね！

じゃあ生徒会候補もクラス代表も決まったしちよつと早いけど授業は終わりね。

今日は初日だから8限までは20分有るから間違えないでね。」

そう言うのと深夏は教室から出て行った。

この後の予定を優樹は横で上機嫌になっている加奈ではなく、左でなにか考えていたユウリに尋ねた。

「なあ篠原、8限ってどこでやるんだ？」

「ん？確か8限は第2魔法実習室じゃなかったかな？あと僕のことにはユウリで良いよ優樹」

「そうか…じゃあ一緒にいこうぜユウリ。

滝川さんも一緒にいけるかな？」

優樹は何故か優樹の顔をチラチラ見ていたマナにも声を掛けた。

「え？わたしも一緒に行ってもいいんですか？」

「当然、同じチーム何だからさ。」

そう優樹が言うとマナはぺこりという音が聞こえてきそうな勢いでお辞儀して、

「ありがとうございます！」
と返事した。

1年4組最初の実技授業はチームメンバー同士の実力を把握する事を一つの目的としていて、内容としては、敷地の広い魔法実習室を使って、チームの中で二人ずつに別れて仮想フィールドの中で二対二の模擬戦をする事だった、模擬戦は10分制限で3回する、チーム内で組み合わせは毎回変えても良い、一回の模擬戦で一チームずつやるような時間は無いので、一度の模擬戦で4組の6チーム全て参加する、模擬戦中に他のチームのメンバーを攻撃してしまった場合は攻撃した者を含んでいるチームのメンバーは今日の実技中はずっと見学になる。

模擬戦の内容は仮想に想定された耐久値を無くすという物で、耐久値は一人につき600あってそれが0になった者から脱落していく、耐久値とダメージ計算は制服などに取り付けて使用する模擬戦用の魔装機器を利用する、これは電源を入れ機器に魔力を注ぎ込むと魔力に反応して、魔力を発した物体の周辺に一種の魔法バリアを形成する、耐久値の計算はバリアの強度を数値化して、バリアに魔法攻撃が接触するとその攻撃の魔力強度、接触した際の衝撃や速度などを数値化してダメージ計算をして、耐久値からダメージを差し引きする。

優樹のチームは優樹、加奈チームとユウリ、マナチームで模擬戦をしている。

一戦目の仮想フィールドは市街地でビルや地下駅などに入る事も出来る。

優樹の残り耐久値は260、加奈が320でユウリは340、マナが560だ、優樹と加奈はユウリの隠密制を利用した奇襲攻撃に苦しめられていた、其れだけならば二人がここまで苦戦することも無いが、加えてマナにはサポート能力と遠距離攻撃があった、ユウリの奇襲に反撃しながらマナの遠距離攻撃にも警戒しなくては成らなく、結果優樹と加奈は二人とも苦戦を強いられているのだった。

優樹と加奈は基本的に戦闘スタイルが同じで、中距離を基本に近、遠距離も臨機応変に使う、敢えて言うならバランスタイプだ、そのためユウリのスタイルはともかく、マナのスタイルとは致命的に相性が悪かった。

「兄さん！流石にこのままだとやばいと思う。」

「ああ：加奈、こうなったら選択肢は二つしかないと思う。ユウリを無視してマナを一気に仕留めるか、逆にマナを無視するかだ！」

「二手に別れて各個撃破するのは駄目かな？」

「それは駄目、二手に別れたらマナに向かった方を集中攻撃された時点で負けだ。」

「じゃあこのまま一人がマナを狙って、もう一人が奇襲に備えるのは？」

「それも駄目、奇襲に備えてる方を集中攻撃されたら終わり。逆転するには多少のダメージは無視して無理にでも二対一の状況を作り出す意外に無い！加奈、お前が勝てると思った方でいこうと思う！どっちか選んでくれ。」

選択権を委ねられた加奈は数秒間の後自分の答えを口にする、

「…私は！……………」

〔4〕 一勝利と敗北と……（後書き）

4話の最後が少し思わせぶりに成っていますが、あれはわざとらしくしようと思った訳では無く、字数の関係です。

5話からは説明ばかりでなく、戦闘や内容などを増やそうと思っています。

〔5〕 一対峙の結末（前書き）

5話は戦闘をメインに書いてみました。

「5」一対峙の結末

優樹と加奈の二人は仮想市街地の中で一番高いビルに入っている。このビルは地上60階まで有るがエレベーターは50階で止まっていて、二人は今階段で屋上を目指している。

二人は奇襲してくるユウリを無視したうえで、今まで防御、攻撃、探知に使っていた魔力を全て移動魔法に注ぎ込んで、マナが潜んでいるであろう、フィールド内で最も高いビルまで移動した。

防御を度外視したおかげで二人の耐久値は、優樹230、加奈260とさらに減ってしまっていた。

「兄さんフロアは確認しなくて良いの？」

「必要無いよ、今まで屋上にいたんだからこのビルから脱出してる可能性は少ないし。」

マナの攻撃を受けて気づいたんだけど、マナは戦闘中は冷静だ、だから狭いフロアで戦うよりも広い屋上でユウリを待って戦った方が有利だって気づくと思うんだ。」

そう言いながら優樹は懷から拳銃形状の魔法効力増加装置Ⅱ「MED」(Magic Effect Increase Device)を取り出した。

MEDは大きく分けると、身体や衣服に取り付けて使用する付属型、剣や銃の様に使用する際に手に直接持つて使用する所持型の二種類に分けられる。

所持型には色々な形状をした物が有り、形状によって近距離戦に特化した物も、その逆もある、戦闘スタイルと上手くマッチすれば付属型よりも戦闘力は数段上がる。

例えば拳銃形状の場合は、魔法の発動速度が速く、近、中距離に適しているが、魔力の収束強度(攻撃力)が低く射程が短い為、近距離においての高速戦闘に向いている。

この様に所持型はある特定の条件下においては付属型を凌駕する事

が出来る。

しかし所持型は特定の条件下意外の状況になると戦闘力を発揮出来ない、それに比べて付属型は圧倒的な戦闘力こそ無いものの、如何なる状況においても一定値以上の戦闘力を発揮し続ける事ができる。優樹と加奈が苦戦していたのもこの特性に依るところが大きい。

今回の模擬戦で使用が許されているのは、学校備品の所持、付属型MED一つずつで、優樹の所持型MEDは射程の短い拳銃型、加奈は片刃で刃渡り65?程の刀を模したものと、遠距離に対して所持型MEDが役に立たなかった。

結果的に近距離での奇襲と遠距離による狙撃を同時に相手にするためには、付属型を使用するしか無かった。



マナはビルの上で模擬戦開始前に支給された小型無線機に向けて声を飛ばしている。

少し焦っているのかその声は速く聞き取り辛い。

「ユウリくん優樹くん達が入ってきてから結構経ってますユウリくんはまだビルに付かないんですか？」

「ビルには付いてるけどエレベーターが降りてこないんだ！」

エレベーターに魔法が掛けられてるみたいだ、階段で行った方が速いと思う。」

「そうですか…じゃあ急いでください！優樹くん達が上がって来るまであんまり時間が無いと思いますから。」

「わかった。」

屋上まで2分で行ってみせる。」

「うん…」

マナが一息吐いて無線を切ろうとした時、ガタンという音と共に、

施錠をして防護結界の張ってある扉が吹き飛ばされた。

マナはその光景を見て驚愕した。

マナの張った防護結界は、結界を無力化しなければ扉を開く事も出来なく出来ていて、結界に何らかの干渉行為が実行された場合、マナが探知出来る様に成っている。

しかしマナが干渉を察知してから扉が吹き飛ばまで認識出来る様なラグは無かった。

マナは自分の結界などのサポート術式については自信があった、それこそ自分の結界に干渉し始めてからほぼ一瞬で無力化されるなど考えてもいなかった。

そして扉があった場所から出て来たのは拳銃型MEDを持った優樹だった、今見た光景がまだ信じられていないマナは優樹に思わず問いかけていた。

「今の：優樹くんがやったんですか？」



優樹は屋上の扉前で足を止めた、

「兄さんどうしたの？」

「加奈、この扉に仕掛けてある結界壊せるか？」

「うん：多分いけるよ。」

そう言うと加奈は制服の背中側に入れてあった刀剣型MEDを取り出し、目を閉じ一呼吸すると、扉から少し離れた空間を下から切り上げる、それと同時に優樹も右手に持った拳銃型MEDのトリガーを引いた。

加奈が結界を破り優樹が扉を吹き飛ばして外に出るとマナが声を掛けてくる。

「今の：優樹くんがやったんですか？」

優樹はマナの問いに応えずベルトに付けてある付属型MEDへ魔力を流し込む。

MEDが加速術式を組み立て始める、それから術式展開までは役コシマ6秒程だった。

マナは魔力の流れを察知したらしく慌てて狙撃銃を模したMEDを構えた。

優樹はマナがMEDを構え終えるまで律儀に待ってから走り始める。入り口からマナのいる位置までは60メートルぐらい、優樹がたどり着くまで4秒程掛かる。

優樹に向けて精密な攻撃が放たれる、優樹はそれを拳銃型MEDで撃ち落としていくが、二人の距離が30メートルを切ったところで優樹が足を止める、マナの攻撃を動かずに捌き続けるが、止まってから5秒程すると背中を向け入り口に戻り、ビルに入っていく、攻撃を捌けなくなった訳では無い、では何故優樹は戻ったのか？

捌く必要が無くなったからだとマナが気付き辺りを見渡すと50メートル弱向こうに、今の10秒程の間魔力の収束が続いていた加奈が、刀を振るモーションに入っているを見つける。

加奈は横に一の字を書くように刀を振るった。

加奈のMEDの太刀筋から残像の様に青白い魔力の塊が放たれる。マナも急いでMEDへ魔力を流し込む、MEDが術式を組み立て始める、効果範囲は銃口の直線上、収束強度を通常の半分にして弾速と収束速度に割り当てる。

通常よりも遥かに高速に術式が展開される。

マナのMEDから赤く光った炎で包んである空気圧縮弾が放たれる。二人の攻撃はほぼ同時に放たれた、加奈の衝撃波はMEDを構えている両手に、マナの圧縮弾は加奈の腹部に、共に直撃した。

着弾は加奈の衝撃波よりもマナの圧縮弾の方が早かったが強度を半分にしたために、加奈に止めを指すには至らなかった。

一方加奈の衝撃波はマナが予め張っていたバリアを破り、マナのMEDを弾き飛ばし、マナの体も後ろのフェンスまで弾き飛ばした。

ユウリは今度も氷弾を無視して優樹を狙うが、今度はMEDではなく優樹自身に狙いを定める。

ユウリは自分の戦闘力が無くなる前に優樹に止めを刺す作戦に切り替える。

3発の氷弾がユウリを直撃する。

ユウリの攻撃は優樹へと届かない。

ユウリの攻撃が優樹に届く前に、優樹の的確な攻撃がユウリの体制を崩している。

前傾に傾いているユウリの胸を更に2発の氷弾が直撃する。

ユウリは前傾姿勢の状態で氷弾の直撃を受けた勢いを利用してバツク宙をきりつつ優樹を斬りつけるが、斬撃は氷弾によって防がれてしまう。

優樹に向き合ったユウリは前方にある魔力反応を探し氷弾の位置を確認する。

（優樹の周囲にある弾は残り2発、弾が切れれば再形成に隙ができるはず、その隙に高強度の攻撃を加えれば…勝てる！）

ユウリは付属型MEDへ魔力を流し込む、優樹に感づかれない為に所持型MEDへ流す魔力量も増やし再度優樹に飛び込む、2発の氷弾がユウリに襲い掛かる。

ユウリはそれをバックステップで避けて、付属型MEDの加速術式を展開する。

次の瞬間ユウリの体は優樹に向けて飛んでいた、但し加速術式の効果ではない。

ユウリの体は優樹の氷弾の最後の3発、ユウリの前方でなく後方に形成された氷弾がユウリの背中を直撃した。

ユウリはなおも体制を整えようとするが、優樹のMEDから連続で5発発せられた空気圧縮弾がユウリに止めを差した。

「優樹は強いなあ。流石に生徒会に指名されるだけ有るよね。」

「止める…過大評価だよそれは。」

魔法の才能は加奈の方が上だな。」

「そうかな？戦闘中にもあんなに冷静で戦略的だったし。」
「ああ：俺は絶対的な戦闘力とか魔力量が無いからな：ああでもしないと周りに勝てないから自然に身に付いただけの事だ。」



8限を終えた優樹は1人で執行科2年5組の前で授業が終わるのを待っている。
より正確には授業が終わって玲奈が教室から出て来るのを待っている。

8限が終わってから優樹は一条と遭遇し、強引に加奈が生徒会候補集会へ送ってから、強引について来る一条をユウリに強制排除してもらった上で2年5組へ向かった。

授業が終わったのか教室から生徒が出てきている。

優樹は数分間玲奈を待っていたのだが玲奈は現れない。

仕方無く優樹は教室に入って玲奈を探すと玲奈の姿は既に無く、教室にいた生徒に聞くと毎年この時期は生徒会で役職に就いている生徒は最終授業を速めに終えて生徒会室に集まっているらしい。
優樹は一つ溜め息を吐いてから生徒会室に向けて歩を進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2572z/>

優等生は俺じゃない

2011年12月27日01時52分発行